

発刊にあたって

入園する子どもたちは健康児ばかりでなく、障害をもった子ども、病弱の子ども、特別の保育を必要とする子どもなどへと拡大してきました。

しかも産休明けという生後8週を過ぎたばかりの幼若乳児へと低年齢化し、また早朝保育、延長保育、夜間保育というように保育時間も延長し、保育園の内容はふくらんできています。

すなわち、家庭で子どもを育てるときに親が経験することのほとんどが、あるいはその一部が保育園に期待されるようになったのです。保育園で働く職員のすべてが親代わりということで、種々の場面で対応している時代です。

たとえば家庭での治療の延長ということで、保育園で気管支喘息の子ども、てんかんの子ども、アレルギーをもつ子ども、アトピー性皮膚炎の子ども、先天代謝異常の子ども、糖尿病の子ども、心臓障害をもつ子どもなどが保育園保育の対象となってきたのです。またときには発熱やけいれんなど突発的な症状に対しても、家庭看護と同様にかかわらなければならない状態が多くなってきました。

保育士さんたちの保育園での仕事に関係した質問事項を整理すると、本来の保育の問題のほかに、「熱が出たらどうしたらよいですか」「お母さんから薬を飲ませて欲しいと言われたときどうしますか」「〇〇症候群というのはどういう病気ですか」などさま変わりしてきています。

本来、家庭で親が直面し解決しなければならないことが、そのまま保育園に持ち込まれてきているのです。

このような保育の状態に対して、職員が親に代わって努力している姿を垣間見て本当に頭が下がる思いがします。

日本保育園保健協議会が発足したのも、このような保育園の現状に対して協力しようということが発端です。現在3,500名近い会員は、子どもたちの保健のために、また保育園の保育にどうしたらより協力することができるか、おたがいの知恵を結集し力をつくしています。

会員の職種は医師・園長・保育士・保健師・看護師・栄養士・行政関係者などのほとんどの職種を包含しています。

本協議会が刊行している「保育と保健」「保育と保健ニュース」は会員同士の情報交換であると同時に研修の場です。また毎年秋に開かれる「日本保育園保健学会」は、その年の集大成であり、会員同士の交流の場でもあります。

今回刊行した「保育保健の基礎知識」は日常の保育の現場で直面する上記の諸問題に対して即効性のある知識と知恵と技術をまとめたものであります。

本書をまとめるにあたっては、会員が日々遭遇する問題点を集め、何百という項目やキーワードを並べ変えながら内容を整理しました。

つぎにこれを現場で働いている会員にも意見を求め、再度検討したあとで、各項目をまとめました。

なにはともあれ、このような本が必要であるという会員の強い要望が、刊行への意欲となったことは、編集者として誠にありがたいことでもあります。